

特集にあたって

鈴木道雄*

米国国立精神衛生研究所の所長であった Thomas Insel は、2010 年の Nature 誌において、統合失調症研究が始まって一世紀、薬物療法が用いられてほぼ半世紀が過ぎたが、統合失調症の転帰に顕著な改善はないと述べた¹⁾。実際に、1921 年から 2011 年に公表された 37 の研究において、統合失調症のリカバリー達成率の中央値は 13.5% であり、時代とともに向上してはいない²⁾。統合失調症の治療では、薬物療法と心理社会的治療が 2 本の柱とされ、両者を統合的に行うことによってリカバリーの達成に近づくことができる、という認識は広く共有されている。とは言え、薬物療法の効果の限界が認識されながらも、わが国の精神科治療は依然として薬物療法が主体となっている。さまざまな心理社会的治療が開発され、一部では明確なエビデンスも示されつつあるが、それらを必要とする患者に十分に提供できているとは言いがたい。それぞれの医療機関あるいは地域において利用可能な心理社会的治療には制約があるため、薬物療法を行いながら、利用可能なリソースに応じて使い分けられている場合が多いであろう。また、患者の個性に十分に配慮するまで至らずに、心理社会的治療を適用している場合も少なくないのではないか。

そこで、本特集では、これまであまり検討されてこなかった「統合失調症の心理社会的治療をどのように使い分け、効果を最大化するか」をテーマに、それぞれの心理社会的治療に精通した著者に、適応を主眼に、期待される効果、施行する際の勘所、最大限の効果を得るための工夫などをまとめていただいた。歴史のある技法についてはあらためてその意義を問い、新しい技法については今後の発展の方向性や可能性を含めて議論することもお願いした。本特集によって、このようなテーマに関する議論が活発化し、それが個々の患者の治療の最適化に繋がることを期待している。

文献

- 1) Insel TR : Rethinking schizophrenia. Nature **468** : 187–193, 2010
- 2) Jääskeläinen E, Juola P, Hirvonen N, et al : A systematic review and meta-analysis of recovery in schizophrenia. Schizophr Bull **39** : 1296–1306, 2013

* 富山大学学術研究部医学系神経精神医学講座 (〒930-0194 富山県富山市杉谷 2630)